

雑 録

志留利亞紀陸生植物

(地球上最古陸生植物)

小 泉 源 一

志留利亞紀 (Silurian or Gotlandian) に於ける陸生植物の化石の存在は獨り上部志留利亞にして其以下にはなし、植物化石の地史上より見れば上部志留利亞は中下部泥盆紀と共に一の植物化石泥盆紀を成すものにて、普通上部志留利亞は下部植物化石泥盆紀である。

此植物化石上の下部泥盆紀 (上部志留利亞紀) に發見されし陸生植物は地球上最古のものにて、皆殆古松葉蘭類 (*Psilophytariae*) なり次表は其全部で中には *Yarravia* の如き合生子囊を有するものさへある。

<i>Baragwanathia longifolia</i>	<i>Sporogonites Chapmannii</i>
<i>Cooksonia hemisphaerica</i>	<i>Sporogonites minor</i>
<i>Cooksonia Pertonii</i>	<i>Thursophyton Millerii</i>
<i>Hedeia corymbosa</i>	<i>Yarravia oblonga</i>
<i>Hostimella silurica</i>	<i>Zosterophyllum australinum</i>
<i>Psilophyton priceps</i>	<i>Zosterophyllum myretorianum</i>

志留利亞紀は海藻が始めて陸上移行 (Subaerial Transmigration) をなし陸生植物と成りしもの多々ありし時代にして、其中此に掲げし古松葉蘭類の如きは立派な維管束植物中の羊齒植物たり得たもので自餘の後生羊齒植物の祖先たりし部類であるが、此時の陸生植物中には必しも形態に於て古松葉蘭類の如くに到らず、別の方針をとりしものも亦少からざりしもの如く、之等は蘚苔類を除きては、皆一の部類として後世に残存する如き適者にはなれなくて、皆絶滅せしものである。

此絶滅せし陸生植物の中に、*Nematothallus* LANG (1937) がある、本植物は勿論體の一部しか知られぬが葉狀體の如き形態にして外皮は細胞區劃狀の絞ある角皮にして、内部の形態は褐藻の如く Prosenchymatous で大小二様の細胞絲より成るが、此細胞管は維管束植物の導管の如く環絞假導管なる如く、胞子は之等の間にありて角皮を有する四面體狀なりと云ふ、LANG 氏は本化石は當時瀉の泥土中に立てる褐藻の一と目せらるる *Prototaxites* の直徑二呎もある幹につける側生器管にあらざるかと云ふ。

Thallogonia (1931) と稱するは亦體の一部化石なるが脊腹性ある葉狀體形にして柔組織より成り上表皮には氣孔あり、下半の束状柔組織内に螺旋絞假導管と篩管部様

の組織も伴へる維管束の如きものあり、下面よりは數個の細胞より成る假根を生じ、上面には角皮より成れる球狀の孢子囊着生し同形孢子を有すと云ふ。

泥盆紀の *Sciadophyton* なども陸生植物なれば何か導束の如きものを有せしならんも孢子囊が十分知られず、又彼の軸の先端の盤狀部に着生しある子囊と見ても普通の古松葉蘭類中の偏入し難き植物と思はる、之亦當時の陸生植物の一型と思はる。

本邦産毛茛科植物數種に就て

大井次三郎

センニンサウは古く本邦から記載された *Clematis paniculata* THUNB. で通つて居り、良い名前ではあるが THUNBERG (in Trans. Linn. Soc. 2, 337, 1794) のものよりも少し早い同名である *Clematis paniculata* J. F. GMEL. (1791) が存在する爲めに日本産の此植物には適用が出来ない、左様すると本邦産の標本から名づけられた學名としては *Clematis Maximowicziana* FRANCH. et SAVAT. Enum. Plant. Japon. 2 (1879) 261. であるが、それよりも前に大陸で似た種類が二つ記載されて居る、滿洲からの *Clematis manschurica* RUPR. (1857) 支那の浙江省からの *Clematis terniflora* DC. (1818) である。

FORBES (in Journ. Botan. 22: 264, 1884) に従ふと浙江省のものは *Cl. manschurica* と同物で兩者を合して歐洲産のものの変種 *Clematis recta* var. *mandshurica* MAXIM. と成るべきで、此種では小葉の脈は表面が凹むが *Clematis paniculata* THUNB. では凹まぬと云ふ。しかし葉脈に関しては本邦産のものも色々であつて區別は困難である、又 MAXIMOWICZ や KOMAROV は區別點として *Clematis terniflora* DC. の葉が乾燥後に黒變することを云ふ。FORBES は此には觸れて居ないが氏に従ふと元來の *Clematis terniflora* DC. は本種と *Clematis Benthamiana* HEMSL. とが混合して居るとの事であるから後者を混同した爲ではないかと想像される、*Clematis terniflora* DC. の原標本がセンニンサウと區別し難いのは久内氏の發表された小泉先生の御高見 (植物研究雑誌、九卷 169 頁) によつてはつきりたしかめられて居る。

又 *Clematis manschurica* RUPR. は MAXIMOWICZ の云ふ様にセンニンサウに比して莖が蔓性と成る事少く、又莖の基部が著しく木質には成らぬのは實際であるが、その他瘦果の多少小形であるとも云へる以外著しい區別點がないので別種ではあり得ない。

以上を總合して考へて見るとセンニンサウの學名は *Clematis terniflora* DC. で宜しい様である、そして北鮮、滿洲等のものは *Clematis terniflora* DC. var. *mandshurica* (RUPR.) OHWI comb. nov. (= *Clematis manschurica* RUPR. = *Clematis recta* var. *mandshurica* MAXIM.) とすべきであらう。